

1 自己評価及び第三者評価結果

【事業所概要(事業所記入)】

事業所番号	2894000203		
法人名	株式会社JAWA		
事業所名	街かどケアホームそよか		
所在地	姫路市大津区勸兵衛町1丁目26番		
自己評価作成日	平成25年5月15日	評価結果市町村受理日	

※事業所の基本情報は、公表センターページで閲覧してください。(↓このURLをクリック)

基本情報リンク先	http://www.java-jp.com/
----------	---

【評価機関概要(評価機関記入)】

評価機関名	特定非営利活動法人福祉市民ネット・川西		
所在地	兵庫県川西市中央町8-8-104		
訪問調査日	2013年5月31日		

【事業所が特に力を入れている点・アピールしたい点(事業所記入)】

ノーマライゼーションの考え方にに基づき、認知症があっても、当たり前のようにその方がその方らしく過ごす日常生活のあり方に日々真剣に取り組んでいる。家庭的な雰囲気の中で、ご利用者が出来る事・したい事を職員が奪わないように、本人の気持ちやペースを大切にしている。また、ホスピタリティの精神のもと、心からのおもてなしの気持ちで声に出されない真のニーズにもお応えできるように努めています。

【第三者評価で確認した事業所の優れている点、工夫点(評価機関記入)】

法人としてのノーマライゼーションを基盤とした確固たる理念に沿い、利用者一人ひとりの普通の暮らしの実現を目指している。その中でも職員は、相手の立場になって考え振り返ってみることで利用者の気持ちを察し、利用者の尊厳を大事にすることを特に重視している。認知症状の進行等により動きも緩慢になり自らの思いも現しくなくなる中で、言葉に出せない表現しにくい思いを汲み取る努力をすることで、その人らしい生活を共に創り、過ごしている。これまでの地域への啓発が浸透する中、事業所が地域の資源として、利用者が住民の一人としての認識を得ることがますます必要と思われる。認知症であっても、地域の住民として自立した生活が継続できることを、利用者の普段の様子や職員の実践を通して積極的に発信されるとともに、今後は地域の認知症の理解に向けた働きかけも期待したい。

V. サービスの成果に関する項目(アウトカム項目) ※項目No.1~55で日頃の取り組みを自己点検したうえで、成果について自己評価します

項目		取り組みの成果 ↓該当するものに○印		項目		取り組みの成果 ↓該当するものに○印	
56	職員は、利用者の思いや願い、暮らし方の意向を掴んでいる (参考項目:23,24,25)	○	1. ほぼ全ての利用者の 2. 利用者の2/3くらいの 3. 利用者の1/3くらいの 4. ほとんど掴んでいない	63	職員は、家族が困っていること、不安なこと、求めていることをよく聴いており、信頼関係ができている (参考項目:9,10,19)	○	1. ほぼ全ての家族と 2. 家族の2/3くらいと 3. 家族の1/3くらいと 4. ほとんどできていない
57	利用者と職員が、一緒にゆったりと過ごす場面がある (参考項目:18,38)	○	1. 毎日ある 2. 数日に1回程度ある 3. たまにある 4. ほとんどない	64	通いの場やグループホームに馴染みの人や地域の人々が訪ねて来ている (参考項目:2,20)	○	1. ほぼ毎日のように 2. 数日に1回程度 3. たまに 4. ほとんどない
58	利用者は、一人ひとりのペースで暮らしている (参考項目:38)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	65	運営推進会議を通して、地域住民や地元の関係者とのつながりが拡がったり深まり、事業所の理解者や応援者が増えている (参考項目:4)	○	1. 大いに増えている 2. 少しずつ増えている 3. あまり増えていない 4. 全くいない
59	利用者は、職員が支援することで生き生きした表情や姿がみられている (参考項目:36,37)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	66	職員は、生き活きと働けている (参考項目:11,12)	○	1. ほぼ全ての職員が 2. 職員の2/3くらいが 3. 職員の1/3くらいが 4. ほとんどいない
60	利用者は、戸外の行きたいところへ出かけている (参考項目:49)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	67	職員から見て、利用者はサービスにおおむね満足していると思う	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない
61	利用者は、健康管理や医療面、安全面で不安なく過ごせている (参考項目:30,31)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	68	職員から見て、利用者の家族等はサービスにおおむね満足していると思う	○	1. ほぼ全ての家族等が 2. 家族等の2/3くらいが 3. 家族等の1/3くらいが 4. ほとんどできていない
62	利用者は、その時々々の状況や要望に応じた柔軟な支援により、安心して暮らせている (参考項目:28)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない				

自己評価および第三者評価結果

[セル内の改行は、(Altキー)+(Enterキー)です。]

自己	第三者	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
I. 理念に基づく運営					
1	(1)	○理念の共有と実践 地域密着型サービスの意義をふまえた事業所理念をつくり、管理者と職員は、その理念を共有して実践につなげている	法人理念を大切に、理念研修に力をいれている。JAWAスタンダード・ホスピリティコンセプトには毎日立ち返って日常のケアの中で理念が実践できるよう心掛けている。	法人理念を常に立ち返る原点としている。介護職員として、利用者へのケアに直結する理念である「自分がされていやなことは決して他人にはしない」ことを、特に重視し周知に努めている。会議等で、職員一人ひとりが納得できるよう十分議論を重ね、意志統一を図っている。	
2	(2)	○事業所と地域とのつきあい 利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、事業所自体が地域の一員として日常的に交流している	提携の農場から届く北海道産とうもろこしを地域にもおすそ分けしたり、地域の祭りや溝掃除・公民館の定期イベントなどには積極的に参加している。	地域の季節行事や清掃等、公民館主催の行事にも定期的に参加し、少しずつではあるが事業所の存在が浸透しつつあることを実感している。地域からの情報提供等、お誘いもあり、近隣住民とのふれあいも生まれてきている。	
3		○事業所の力を活かした地域貢献 事業所は、実践を通じて積み上げている認知症の人の理解や支援の方法を、地域の人々に向けて活かしている	トライアルウィークで地域の中学生の体験学習やその他実習生の受入れも積極的にしている。またAEDの設置を活かし、『ひめじ救命ステーション』として登録。昨年度出来なかった地域向け救命講習会をしたいと考えている		
4	(3)	○運営推進会議を活かした取り組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実際、評価への取り組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている	運営推進会議ではブログ『JAWAのみんなの声』を使用し、好評を頂いている。地域の情報を収集し、また頂いた意見をもとにイベントもしたいと考えている。地域住民の方との垣根は低くなっている。	毎回地域代表者からの情報提供を基に、行事への参加交流の提案や意見が出され、活発な意見交換となっている。今夏、事業所を開放しての夏まつり開催についてや、地域の防災対策の一環として、事業所を中心とした取組みについて提案があり、協力体制も検討している。	
5	(4)	○市町村との連携 市町村担当者と日頃から連絡を密に取り、事業所の実情やケアサービスの取り組みを積極的に伝えながら、協力関係を築くよう取り組んでいる	昨年度、管理者は姫路市グループホーム連絡会の役員として市に働きかけ、市独自の基準緩和がなされた。また、事故があれば迅速に適切に報告をすることで信頼関係作りをしている。	グループホーム連絡会を通じて、事業所の現状を伝えることで、市担当者との双方向での理解が進み、より協力関係を深めることができた。事業所としても、利用者の状況や必要な事務連絡等、速やかに連絡、報告している。	
6	(5)	○身体拘束をしないケアの実践 代表者および全ての職員が「介指基準における禁止の対象となる具体的な行為」を正しく理解しており、玄関の施錠を含めて身体拘束をしないケアに取り組んでいる	理念研修ではノーマライゼーションについて具体的に学び、職員一人ひとりが身体拘束をしないケアを正しく理解し実践をしている。玄関を施錠しないケアは当たり前のこととして10年間続け、抑制せずにリスクを下げるノーマライゼーションが実践されている	職員は法人理念に則り、原則拘束はしないことを周知している。会議等で、利用者個別の状況に応じ、ケアの方針について検討し、適切な対応に努めている。玄関の出入りについては、現在利用者の状態に応じて期間を限定し、センサーにより察知、見守っている。	
7	(6)	○虐待の防止の徹底 管理者や職員は、高齢者虐待防止関連法について学ぶ機会を持ち、利用者の自宅や事業所内での虐待が見過ごされることがないように注意を払い、防止に努めている	高齢者虐待防止法については新人研修で学び、また年に一度研修を実施。また、虐待のニュースがあるたび考える機会を設け、虐待は身近であることと意識し、職員同士話す機会を設けている。	職員は定期的に学ぶ機会を持っている。それ以外に管理者は随時事例を提示し、職員間で議論を重ね、個々の気付きを促し、意識を深めるよう努めている。職員相互の連携を重視しており、そのために、職員個々の勤務状況や精神面への配慮にも心がけている。	

自己	者三	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
8	(7)	○権利擁護に関する制度の理解と活用 管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学ぶ機会を持ち、個々の必要性を関係者と話し合い、それらを活用できるよう支援している	成年後見制度を利用する利用者也複数おられるため関係者と話し合う機会も多い。また、外部研修も積極的に参加している。	該当者が複数おり、身近な制度となってきた。外部研修にも参加し、報告研修により全職員への理解を図っている。管理者は契約時等必要に応じて情報提供を行い、必要性についても認識している。	
9	(8)	○契約に関する説明と納得 契約の締結、解約又は改定等の際は、利用者や家族等の不安や疑問点を尋ね、十分な説明を行い理解・納得を図っている	契約締結時などでは十分な時間をとり出来る限りわかりやすく説明をしている。また場面に応じて説明をしながら、理解をして頂けるよう努めている。	契約の際は、法人理念に沿った事業所の方針等を十分理解してもらうことを前提としている。さらに医療面や退居に関する事など、家族の不安や費用面での丁寧な説明を心がけている。個別の状況に応じた生活面での相談にも応じ、リスクも含め納得した利用に努めている。	
10	(9)	○運営に関する利用者、家族等意見の反映 利用者や家族等が意見、要望を管理者や職員ならびに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	苦情相談窓口を明確に謳っている。また小さな苦情やご意見をいただけるよう日々のコミュニケーションを図っている。特に利用者の意見・要望について最重要視し、意向に添った支援が出来るよう心掛けている。	普段の来訪時には、別途時間を設け家族と話しをする時間を持っている。多数の家族参加があるイベント後に家族会を開催し、その中で積極的な意見交換を行っている。家族へのアンケートからは、要望等の他、前向き、且好意的な意見もあり、職員の意欲向上となった。	
11	(10)	○運営に関する職員意見の反映 代表者や管理者は、運営に関する職員の意見や提案を聞く機会を設け、反映させている	個人面談を行ったり会議に参加することで、職員の意見を聞く機会を設け反映させている。また実践しやすいようアドバイスをし、職員が持つ力を発揮出来るよう努めている。	職員の主体性を重んじた会議等での雰囲気づくりや職員の積極性を活かす環境を重視している。職員一人ひとりが意見を発信し、納得のいく議論を重ねることで職員のチーム体制の強化を図るようにしている。意見や提案を反映させ実践につなげることで、個々のレベルアップともなっている。	
12		○就業環境の整備 代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境・条件の整備に努めている	法人の人事担当役員は上から目線ではなく現場の意見をよく汲み取りアドバイスをしている。責任範囲を明確にすることで責任をもって仕事に取り組めるようにしている。		
13		○職員を育てる取り組み 代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実際と力量を把握し、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている	管理者や職員の力量を把握し、責任や役割を与えながらも、大きな失敗をすることなく業務が進行できるよう適切にフォローするよう努めている。		
14		○同業者との交流を通じた向上 代表者は、管理者や職員が同業者と交流する機会を作り、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取り組みをしている	管理者は昨年度までグループホーム連絡会で役員をつとめた。成果の一つとして市内の事業者が空室や緊急入居希望者の情報を共有するシステムを作った。		

自己	者 第	項 目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
Ⅱ.安心と信頼に向けた関係づくりと支援					
15		○初期に築く本人との信頼関係 サービスを導入する段階で、本人が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、本人の安心を確保するための関係づくりに努めている	入居して間もない時期には利用者と早期に信頼関係が結べるよう、様々なサービスの提案をし信頼関係を作れるようにしている。		
16		○初期に築く家族等との信頼関係 サービスを導入する段階で、家族等が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、関係づくりに努めている	入居直後は毎日近況報告を実施し、ご家族の不安の把握とその解消、そして早期の信頼関係作りに努めている。		
17		○初期対応の見極めと支援 サービスを導入する段階で、本人と家族等が「その時」まず必要としている支援を見極め、他のサービス利用も含めた対応に努めている	入居相談の時点で、その時に必要としているサービスが何であるかを広い視野で検討し、入居するしないに関わらずソーシャルワーカーとして専門的な立場で相談に乗っている。		
18		○本人と共に過ごし支えあう関係 職員は、本人を介護される一方の立場におかず、暮らしを共にする者同士の関係を築いている	ご利用者が出来る事・やってみようと思う気持ちを奪わないよう、ご利用者お一人おひとりのペースやタイミングでして頂けるよう支援している。その中で得意な事や関心のあることを活かせるよう努めている。		
19		○本人を共に支えあう家族との関係 職員は、家族を支援される一方の立場におかず、本人と家族の絆を大切にしながら、共に本人を支えていく関係を築いている	家族には誕生日やイベントなどには参加してもらい、役割を持ってもらうことで、家族も本人の支援者の一人として認識している。		
20	(11)	○馴染みの人や場との関係継続の支援 本人がこれまで大切にしてきた馴染みの人や場所との関係が途切れないよう、支援に努めている	馴染みの関係が継続できるよう、病院や散髪屋、お寺やお墓参り等、馴染みの場所に行けるよう実践している。本人の友人が訪ねて来られた時は特に、また来て頂けるように工夫している。	本人の意向に添い、これまでのつながりを大事にした支援に努めている。友人や親しくしていた人が訪ねて来ることもあり、事業所主催行事に声かけし、一緒に参加交流してもらうよう案内し、継続的な付き合いができるよう働きかけをしている。家族にも案内し、一緒に過ごす時間を設けている。	
21		○利用者同士の関係の支援 利用者同士の関係を把握し、一人ひとりが孤立せずに利用者同士が関わり合い、支え合えるような支援に努めている	利用者同士の間人関係を把握している。その中で孤立したり人間関係がこじれないようさりげなく支援している。例えば食事の場所やタイミングも配慮している。		

自己	者 第三	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
22		○関係を断ち切らない取組み サービス利用(契約)が終了しても、これまでの関係性を大切にしながら、必要に応じて本人・家族の経過をフォローし、相談や支援に努めている	契約終了時には、今後もいつでも相談に乗れ、出来る限りの協力ができることを伝えている。退居後も年賀状の交換が出来ているご家族も複数おられる。		
Ⅲ. その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント					
23	(12)	○思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している	本人の生活に関する意向(真のニーズ)の把握に努め、介護者の価値観や都合を押し付けるのではなく、ご利用者の立場で考えられるようにしている。	以前好きだったことや得意なことを本人や家族等に聞いたり、本人との会話から表情やしぐさ等を汲み取っている。毎月のモニタリングにより、職員間でニーズを出し合い、本人の立場に立って出来ること、出来ないことを検討してみるが、まずは実践してみることを優先して取り組んでいる。	
24		○これまでの暮らしの把握 一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、生活環境、これまでのサービス利用の経過等の把握に努めている	入居時のアセスメントはもちろん、日常の何気ない会話からもこれまでの暮らしを把握できるように全職員で取り組んでいる。		
25		○暮らしの現状の把握 一人ひとりの一日の過ごし方、心身状態、有する力等の現状の把握に努めている	ケース記録を毎日記入し、お一人おひとりの情報を職員全体で共有している。介護職員は業務に入る前、必ず業務日誌・ケース記録・連絡ノートを確認している。		
26	(13)	○チームでつくる介護計画とモニタリング 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映し、現状に即した介護計画を作成している	毎月モニタリング会議を実施し、介護計画が現状に即しているか、新たなニーズが出てくるかを話し合っている。また会議では職員一人ひとりが意見を発言しやすい雰囲気作りを行い、色々な視点から考えられるようにしている。	全職員で本人の思い、或いは、実生活に即しているかを見極める。本人自身が達成感を得られているかについても、毎月のモニタリングで検討している。職員の都合が優先されていないか、常に本人本位の計画となっているかを意識して作成している。	
27		○個別の記録と実践への反映 日々の様子やケアの実践・結果、気づきや工夫を個別記録に記入し、職員間で情報を共有しながら実践や介護計画の見直しに活かしている	日々の気づきをケース記録や連絡ノートに記入し、職員間の情報交換・共有をしている。また会議で実践方法を検討し、その評価も行っている。		
28		○一人ひとりを支えるための事業所の多機能化 本人や家族の状況、その時々生まれるニーズに対応して、既存のサービスに捉われない、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる	ご利用者のその時のニーズに対して柔軟に対応することが最も大切な事として職員全員が理解し対応している。ご要望に応えることが難しいことでも単に「出来ない」のではなく、「出来ること」を提案するようにしている。		

自己	第三	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
29		○地域資源との協働 一人ひとりの暮らしを支えている地域資源を把握し、本人が心身の力を発揮しながら安全で豊かな暮らしを楽しむことができるよう支援している	施設内サービスだけがご利用者生活の全てではないことを新人研修でも教え職員は理解している。また管理者やケアマネを含めた職員全員が地域資源の把握に努め、ご利用者のニーズに地域資源を結び付けれるよう努めている		
30	(14)	○かかりつけ医の受診支援 受診は、本人及び家族等の希望を大切に、納得が得られたかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	入居前の馴染みのかかりつけ医にかかっている方も多し。また、当施設の協力医とは忌憚のない意見を交換しあえる信頼関係を築けている。	事業所の協力医については、入居時十分説明を行い、入居前のかかりつけ医継続希望がある場合は事業所が支援することで安心となっている。通院は家族が送迎の時もあるが、基本的に職員が行い、かかりつけ医と事業所の関係を築きながら適切な医療を受けられるよう、支援がなされている。	
31		○看護職との協働 介護職は、日常の関わりの中でとらえた情報や気づきを、職場内の看護職や訪問看護師等に伝えて相談し、個々の利用者が適切な受診や看護を受けられるように支援している	今年度より看護師が週2回訪問している。日常の何気ないことも伝えて情報を共有するように努めている。		
32	(15)	○入退院時の医療機関との協働 利用者が入院した際、安心して治療できるように、又、できるだけ早期に退院できるように、病院関係者との情報交換や相談に努めている。あるいは、そうした場合に備えて病院関係者との関係づくりを行っている。	入院時には、医師やソーシャルワーカーとも話しあい、早期退院のため退院時期の目標を明確にしている。それにより安心して治療にのぞめ、ご家族にも安心頂いている。	事業所はこまめにお見舞いに行き、随時担当医や家族と連絡を取り合って早期退院につなげている。さらに週2回訪問看護と連携を図り、退院後の安心できる体制についてより密な協力関係を築いている。	
33	(16)	○重度化や終末期に向けた方針の共有と支援 重度化した場合や終末期のあり方について、早い段階から本人・家族等と話し合いを行い、事業所のできることを十分に説明しながら方針を共有し、地域の関係者と共にチームで支援に取り組んでいる	ターミナルケアにあたり出来る限り早い段階でご利用者のご家族の意向を伺い、出来る事と出来ない事を丁寧に説明し、またかかりつけ医や看護師と連携を図りながらチームとして出来る方法を提案している。	契約時、本人、家族と話し合い「重度化した場合の対応の指針」の同意書を取り、入居後もそのつど話し合っている。職員の研修も行い、準備体制はできている。訪問看護の利用や病院側との連携で、希望者には対応していきたいとしている。事業所を在宅に近づけるべく、家族がゆっくり泊まれる環境も整えている。	
34		○急変や事故発生時の備え 利用者の急変や事故発生時に備えて、全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている	職員は定期的に救命講習を受講し、急変時に冷静に対応が出来るよう準備している。		
35	(17)	○災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を全職員が身につけるとともに、地域との協力体制を築いている	定期的に避難訓練を実施し非常時の対応が不安の無いよう準備している。	年2回夜間想定を基本に、消火、避難、通報訓練を行っている。水害の防災対策として事業所独自では2階への避難を想定している。水と冷凍食品の備蓄もできている。近隣住民との協力体制に至っては、まだ不十分である。	今後、防災力を高めるためには地域住民との相互協力(共助)が得られるような体制作りが必要である。運営推進会議で協力体制の具体化について検討が進むことを期待したい。

自己	者 第三	項 目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
IV. その人らしい暮らしを続けるための日々の支援					
36	(18)	○一人ひとりの尊重とプライバシーの確保 一人ひとりの人格を尊重し、誇りやプライバシーを損ねない言葉かけや対応をしている	ご利用者を人生の先輩として尊敬の念を忘れないよう、まず言葉遣いを正すことで気持ちを正すように努めている。また職員は容易にご利用者のプライバシーを侵す可能性があることを自覚することで、プライバシー保護の意識を徹底している。	管理者と職員は、共に利用者となれあいの関係にならないよう日常的な言葉かけにも、丁寧語で話す事を徹底している。利用者の人格を尊重し、プライバシーを損ねない対応となるよう努めている。	
37		○利用者の希望の表出や自己決定の支援 日常生活の中で本人が思いや希望を表したり、自己決定できるように働きかけている	生活のあらゆる場面で、利用者の自己決定する機会を職員が奪わないように注意しケアに当たっている。またご利用者に希望を言って頂きやすい雰囲気作りのため、職員は忙しそうに見えないように努めている。		
38		○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切に、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している	職員の価値観や都合、タイムスケジュールを押し付けることなく、一人ひとりのペースを常に意識し、日々の生活を共に過ごしている。		
39		○身だしなみやおしゃれの支援 その人らしい身だしなみやおしゃれができるように支援している	本人のおしゃれを支援することも大切な事であると研修で学んでいる。そのためのお手伝いも日々実践している。		
40	(19)	○食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員と一緒に準備や食事、片付けをしている	調理の際はご利用者にも出来る範囲内でやりたいことを一緒にしている。またご利用者の希望するメニューを提供する機会も週に1度確保し実施している。	法人より統一の月間献立カレンダーと食材が届く。季節メニューや利用者の希望するメニューも週1度加わり、すいかが食べたいのリクエストで買物に出かけることもある。利用者と職員は、おやつにホットケーキやたこやき、ゼリー等食事が楽しみになるよう一緒に作っている。	
41		○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	水分や食事の摂取量を把握し、記録している。その上で、ご本人のお好みや習慣を日々情報を蓄積させながら、美味しいものを美味しく食べていただく工夫をしている。		
42		○口腔内の清潔保持 口の中の汚れや臭いが生じないよう、毎食後、一人ひとりの口腔状態や本人の力に応じた口腔ケアをしている	一人ひとりの状態に合わせた口腔ケアに努めている。今年度は歯科医の協力も得て、口腔ケア研修会も行った。		

自己	者三	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
43	(20)	○排泄の自立支援 排泄の失敗やおむつの使用を減らし、一人ひとりの力や排泄のパターン、習慣を活かして、トイレでの排泄や排泄の自立にむけた支援を行っている	排泄のパターンや失禁の種類を把握分析し、出来る限り自立に向けた支援に取り組んでいる。	一人ひとりに沿った時間帯でのトイレ誘導を行い、その事によって失敗やおむつの使用も減らせている。トイレ誘導だけでなく既往症を見て、個別の排泄パターンを把握し、自立に向けた支援に取り組んでいる。	
44		○便秘の予防と対応 便秘の原因や及ぼす影響を理解し、飲食物の工夫や運動への働きかけ等、個々に応じた予防に取り組んでいる	排泄や便秘の把握についてはご利用者のプライバシーの問題と密接に関係するため、配慮が必要である。その上で可能な限り把握に努め、予防について様々な方法を提案している。		
45	(21)	○入浴を楽しむことができる支援 一人ひとりの希望やタイミングに合わせて入浴を楽しめるように、職員の都合で曜日や時間帯を決めず、個々にそった支援をしている	入浴は職員の都合で決めることなく、一人ひとりの希望や状態にあった方法で支援することを心がけている。好みのお湯の温度も把握し、単なる清潔保持だけではなく入浴を楽しむことにも心掛けている	一人ひとりのペースと希望に沿った入浴支援が行われている。入浴拒否の場合も無理強いないで、好みのお湯を探り、タイミングに併せて声かけしている。適温や湯量にも配慮し、清潔保持だけでなく入浴を楽しめるようにしている。	
46		○安眠や休息の支援 一人ひとりの生活習慣やその時々状況に応じて、休息したり、安心して気持ちよく眠れるよう支援している	起床や就寝のタイミングなどは過去の生活歴や習慣も把握し、その日その日の要望や状況に合わせて柔軟に対応している。また安楽な姿勢保持(ポジショニング)の技術向上にも努めている。		
47		○服薬支援 一人ひとりが使用している薬の目的や副作用、用法や用量について理解しており、服薬の支援と症状の変化の確認に努めている	服薬間違いや漏れがない様、防止策を実施している。		
48		○役割、楽しみごとの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、嗜好品、楽しみごと、気分転換等の支援をしている	生活の楽しみのためにレクリエーションや大小様々なイベントを企画している。子供っぽい内容にならないよう大人仕様にするよう心掛けている。		
49	(22)	○日常的な外出支援 一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援に努めている。又、普段は行けないような場所でも、本人の希望を把握し、家族や地域の人々と協力しながら出かけられるように支援している	外出プランとしてドライブや買い物に行くことも多く、またその日の希望で外出することも多い。また、普段行けない場所へも特別な時には行けるよう本人の希望の把握とその支援も努めている。	利用者一人ひとりの希望する日曜品の買物で外出する。家族も参加できる誕生日一日デートプランを作り、ホテルで食事を楽しんだり、又お好み焼きやカラオケBOX、プリクラも大変喜ばれた。プロのメイクで家族と共に写真の撮影会も行っている。敬老の日の記念は希望する利用者家族で、ランチクルーズに出かける支援もしている。	

自己	者	第三	項目	自己評価	外部評価	
				実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
50			○お金の所持や使うことの支援 職員は、本人がお金を持つことの大切さを理解しており、一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持したり使えるように支援している	利用者がお金を持つことも大切な事であると認識しつつ、預かり金を金庫でお預かりしていることを本人にその都度伝え安心してもらえるよう支援している。また、移動パン屋の訪問により、好きなものを買うことの楽しみの支援をしている		
51			○電話や手紙の支援 家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援をしている	電話がしたいとのご希望があった場合は、基本的に電話していただく支援をする一方、ご家族の状況も勘案し良い家族関係の継続にも配慮している。		
52	(23)		○居心地のよい共用空間づくり 共用の空間(玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等)が、利用者にとって不快や混乱をまねくような刺激(音、光、色、広さ、温度など)がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている	季節感のある雰囲気作りに配慮しながら、心地の良い音楽や温度湿度も気を遣っている。「危険だから」という理由でリビングから物を無くし過ぎないように注意している。家庭的で生活しやすい環境を作るように努めている。	温度、湿度に配慮され、広くてゆったりした開放感ある共用空間となっている。朝は換気に気をつけている。玄関やリビングに、又食卓に花が飾られ家庭的な優しさを感じる。季節に併せた飾りもシンプルで落ち着いた雰囲気となっている。	
53			○共用空間における一人ひとりの居場所づくり 共用空間の中で、独りになれたり、気の合った利用者同士で思い思いに過ごせるような居場所の工夫をしている	気の合う利用者同士が心地よく、もしくは気が合わない利用者同士が苦痛を感じないように、テーブルの配置や逃げ場にも配慮している。		
54	(24)		○居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みのものを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている	使い慣れたものや使いやすいものを持って来ていただけるよう、呼びかけている。また大切なプライベート空間であることの配慮により、居室に入らせていただく場合はノックとお声かけをしてから靴を脱いで入室するマナーを徹底している	使い慣れた馴染みの家具と、お気に入りの写真や部屋飾りがある。以前の生活様式を継続し、その人らしい生活空間になっている。居室に入る場合、必ずノックをし、靴を脱いでの入室で、職員のマナーの丁寧さが感じられた。	
55			○一人ひとりの力を活かした安全な環境づくり 建物内部は一人ひとりの「できること」「わかること」を活かして、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように工夫している	自立支援と安全管理という二つの視点を持って、行動の抑制をすることなくリスクを減らすという工夫をし続けている。また出来ることを奪わないよう、一度に複数の職員がキッチンに立ちすぎないようにも注意している		